旧今井家住宅・美濃史料館 / 概要

現在の美濃市の和紙問屋は、18 世紀後半の江戸時代（1603～1867 年）から、膨大な富を築き上げました。美濃市の歴史的な地区の中心に位置する大きな住宅からも分かるように、中でも一番繁盛していたのは今井家でした。今井家は、美濃の庄屋または長（市長のようなもの）を務めていました。地租が建物の道沿いの正面幅をもとに決められていたこの時代、江戸時代中期に建築された今井家の住宅は、街一番の幅を誇っていました。

作業用に設計された住宅

土間仕様の幅の広い玄関となっている住宅の正面は、商いに使われていました。この空間が住宅の端から端まで続いており、配達や接客用に設計されたものでした。平均的な問屋の幅が約 6～10 メートルだったのに対し、今井家の住宅の幅は 22 メートル近くもありました。このことは裕福な証しだっただけでなく、住宅の裏側の保管庫で紙を輸送するための大きな馬車が出入りする際に実用的でした。幅の広い片持ち正面扉は天井にひっかけて現代のガレージ扉のように開くことができました。また、ドア枠は馬車が玄関から直接入れるよう外すことができました。

生活空間は一段高くなっていて、畳が敷き詰められていました。玄関から入ってすぐのところにある狭いはしごは、上階へと続く小さな昇降口に続いています。江戸時代、10 歳くらいの子どもが年季奉

公人や使用人として問屋で働き、使い走りをしたり接客をしたり、あるいは家事を手伝ったりすることは一般的でした。夜になると、上階で寝ている年季奉公人たちが逃亡できないように、はしごは外されていました。

公私の空間

客は、玄関で靴を脱ぎ、畳や帳机や火鉢が配された玄関のすぐ隣にある帳場へ上がるよう、案内されます。客や商人が火鉢のすぐそばに座ってくつろぎ、タバコを吸ってから作業に入るのが一般的でした。

お得意様などは、帳場の裏の小さな茶室へと案内されることもありました。重要な客の場合は、公共部を通らずに済むよう、道路から直接入れる別の玄関が用いられていました。茶室の障子には本美濃紙が使われています。

蔵と庭

住宅の裏にある ４ つの蔵は、紙や貴重品などの保管に使われました。壁は、防炎剤として分厚いしっくいで覆われています。現在、蔵の部分は、手紙、絵画、写真、模型などを通して美濃市の歴史を伝える史料館となっています。中にある庭が、住宅と蔵を仕切っています。

防火

庭の後方には、稲荷神を祀る稲荷神社があります。神社正面にある石灯ろうは、ハート形の彫刻が観光客の間で人気です。この彫刻は、イノシシの目を表した猪目のモチーフです。イノシシは、火事を察していち早く安全な場所へ逃げる動物と考えられていました。このハート形の彫刻は、火事除けのお守りとして神社仏閣によく見られる動物です。

この辺りの商人たちは、住宅の片側にうだつ（漆喰を塗った防火壁）を建てて、火災時に屋根から火が移るのを防いでいました。この防火壁はやがて富の証となり、次第に精巧な装飾へと変化していきました。うだつの上がる町並みの道路は広く、付近の港へ紙を運ぶ馬車が通りやすいようになっていましたが、これは、炎が燃え広がりにくくするためのものでもありました。